



お伊勢山から宇和海の眺め

前号に引き続き、戸島の続編。このお伊勢山は、岬のように海へ少し突き出しており、美砂子という本浦の南の小さな集落が、ここからだと木陰の間から真下に見える。地元の方らしき語り口の声が、間近によく聞こえる。昼下がり、コトリともしない浦の静けさと、浜気質の大らかさと。大体において、何故か浜の人たちの地声は大きい。

先ほどのお社の石垣が気になりそばで見ると、やはり2メートルを優に越える高さ。台風や冬の海風から長年守ってきたに違いな



社殿を囲む高石垣

いが、大神宮の社は既に新築され、この囲みだけが歴史の重みを伝えている。鳥居の注連縄などは何とビニールロープ、全天候型？注連縄となっていた。

場所には、食料を貯蔵していたものらしい。注連飾りの石の前には、賽銭箱代わりのアワビが置かれ、素朴な信仰の継承がなされている事に、島人の心の温かさが伝わった。

さて、お伊勢山の丘を下り、戸島探訪の本命である龍集寺に向かう。肩を寄せ合うような本浦集落の山すそに、寺の本堂とそれに続く墓地がある。戦国期に、数奇な運命の後、この島で余生を過ごすこととなった土佐のクリシタン大名一条兼定。洗礼名はドン・パウロ、その墓がこの寺にひっそりと在る。土佐一条家は、京都から下向し、中村で在地領主となった戦国大名だが、兼定が生まれた天文十二年(1543)頃は、中央では武田・上杉・今川・北条などが鏑を削っていた時代。四国にあっては、やがて長曾我部元親が力を持ち、次第に一条家はその勢力を失ってゆく。19歳の時、



“MY TOWN” うおっちんで 歩キ目デス & 足ラテス

Vol.52

『戸島紀行』パートII 宇和島市

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー



兼定の墓石



龍集寺参道

兼定は対岸豊後の雄キリシタン大名大友宗麟の娘を娶り、戦乱に明け暮れる中、その支援により失地回復を目論むも、結局は天正四年（1567）の「渡川の戦い」において元親に敗れ、かつて土佐の国主であった一条家は滅亡する。

時が流れ、命承らえた兼定はここの戸島に隠棲し、長曾我部から送られた刺客によって重傷を負うも、数年を生き天正十三年七月一日（太陽暦だと27日）に、その波乱に満ちた43歳の生涯を終えた。

思えば京都の五摂家につながる名門に生まれ、領地領民を守ることを宿命づけられた彼が、権謀術



宇和島市指定史跡 “一条兼定の墓”

数の戦国時代の中で翻弄され、晩年に信仰にすぎることを得た心の安らぎは、果たしてどういふ境地だったのだろうか。村人からもねんごろに祀られている小さな墓石を拝みながら、兼定の胸中に想いを馳せてみた。墓は本堂の裏手に、海を望んで建っている。

周りの墓地を眺めると、一際大きな墓石が並んでいた。戸島で庄屋をしていた田中家のもので、五輪塔の高さは大きい方で2・6mほどあり、まるで大名墓のようだ。田中家は、八幡浜の向灘から移ったが、隣の日振島にある島大名と呼ばれた清家庄屋の五輪塔も異例の大きさで、宇和島藩における当時の島庄屋の権勢については、また別な興味を引かれる。加えて、歴史の奇遇と言うべきか、田中家からは、二人の著名なカトリックの司祭が輩出しておられるとか。ドン・パウロこと一条兼定が終の住処とした戸島ならではの縁ある話である。

寺におられた千葉城圓住職から、「土佐一条家五代像」という貴重な絵巻物を観せて頂いた。そ



戸島庄屋 田中家の五輪塔

こには、一条家の祖藤原鎌足公を筆頭に、土佐一条家の歴代が描かれていて、右下に「従三位左中将権中納言一條兼定郷」とあり、その端正な公達顔の人物像からはとても前述の苦難の生き様は伺えないのだった。不思議な余韻のまま寺を辞す際に、山門前の石段で足元の小さなスミレに気がついた。すると、その傍にはご住職の句が添えられていて「石段の スミレ一步が 阿弥陀仏」とあり、何やら心を浄化されたような敬虔な気持ちで島を後にし、帰りの船に乗ることとなった。

(注) 渡川は、四万十川のこと